

第五章 神を殺す人びと



エロシエンコの像（中村舜^{ハナ} 一九二〇年）

- 11 「米国ニ於ケル日本革^メ明^{メイ}党の状況」『明治文化全集』社会編 一九二九年 日本評論社版所収。改版 一九五五年 日本評論新社。
- 12 『本邦社会主義者無政府主義者名簿』『社会主義者無政府主義者人物研究資料一』一九六四年 社会文庫版所収。
- 13 『特別要視察人状勢一斑』第四 発行年代不明 内務省警保局。復刻版 発行年代不明 近代日本史料研究会。
- 14 『米国ニ於ケル日本社会主義者無政府主義者沿革』一九一一年 内務省警保局（○）。復刻版 一九六四年 柏書房。
- 15 11と同じ。
- 16 13と同じ。
- 17 山川菊栄『女二代の記』一九五六年 日本評論新社。増補版『おんな二代の記』一九七〇年 平凡社。後者には付録として「山口小静さんを思う」を追加。
- 18 同右、平凡社版。
- 19 『佐々城松栄遺稿集』一九三四年 日本エスベラント学会。
- 20 平出木『プロレタリア文化運動に就ての研究』司法研究報告第二八輯九 一九四〇年 司法省調査部。復刻版 一九六五年 柏書房。
- 21 山口小静述『匈牙利の労働革命』一九三三年 水曜会出版部。このパンフレットに収録されなかった山口の文章「安倍能成氏の平和論」（遺稿）が『種時く人』第一九号にのっている。
- 22 比嘉春潮『沖繩の歳月』一九六九年 中央公論社。
- 23 解放運動犠牲者追悼世話人会『解放のいしずえ』一九五六年 同会。
- 24 菊川忠雄『学生社会運動史』一九三二年 中央公論社。増補訂正版 一九四七年 海口書店。なお、この本の本当の筆者が菊川でないことと推定されることを付け加えておく。内容的に言って、菊川の中間派社会民主主義といちじるしく矛盾するからである。本当の筆者は、菊川の後輩の新人会員か、学生出身の日本労働組合同盟関係の左翼の人で、保釈中か執行猶予中に菊川の名を借りたものであらう。

すべての社会主義者はエスベランチストであるべきだ。またすべてのエスベランチストは社会主義者であるべきだ。

エロシエンコ

大正デモクラシーのころ——新人会の人びと

一八八四年十一月、この年を「自由自治元年」と号して決起した秩父困民党が政府軍の砲火を浴びて潰走し、日本の武力的ブルジョア革命運動は挫折した。これ以後の旧自由党による諸事件、たとえば朝鮮への武力干渉をもって国内革新の引き金にしようと企てたと言われる大阪事件のごときは、もはや本来のブルジョア革命運動の正統にあるものではなく、ねじ曲げられた民主主義運動のカリカチュアであり、大久保・伊藤を頂点とする絶対主義政権の前に屈伏した自由党幹部の荒廃を示すものであって、アジア侵略の第一陣としての征韓論の自由主義的(?)メーキャップにしかすぎない。

自由民権運動が、不平士族・豪農・中農層によって、また、秩父に見られるように貧農との同盟の上に展開されたもので、フランス革命のイデオロギーを背後に持つものであるとすれば、東京帝国大学教授吉野作造法学博士を代表者として、一九一六年からはじまる「民本主義」運動は、前者と同じ階級をも地盤としているにせよ、より多く都市ブルジョアジーの発達に支えられており、イギリス的立憲君主制を公然と主張したものであった。当然、それは「陛下の反対派」のワクを出るものではなく、本来の意味におけるデモクラシーと相当遠いところにあった。若き日の山川均が、この吉野にのみついたのも、当然すぎるほど当然なことであった。もっとも、山川自身が後になって指導した労農派の戦略も、天皇制との対決を避けることに汲々とした点においては、吉野を去ること五十歩百歩の

差にすぎなかったのであるが。

この吉野もエスペラント普及のために一役買ったことがある。
「私はこれよりさき明治三十六年（一九〇三年）五月発行の『新人』誌上に『世界普及語エスペラント』と題し、かなり詳細の紹介を公にしたことがある。これはその当時愛読しておったロンドン『レビュー・オヴ・レビュー』誌に出ていたウィリアム・ステッドの論文を訳したものであった。……」

『新人』は海老名弾正先生の牧せる本郷の青年信徒の宣伝機関で、同先生を主筆とし大学学生たる私もその編集同人の一人であったのである。

『新人』への寄稿と同時に、『レビュー・オヴ・レビュー』の広告により、オーコンノル著『エスペラント』という独案内をロンドンへ注文した。この本は今もって所蔵しているが、十一月十日到着の付記があるから、私も明治三十六年の十一月からこれを学びはじめたというわけになる。まじめにやらなかったし、また間もなく中止したから、物にはもちろんならなかった。物にならない点は今日もいぜんとして旧のごとしである。」

遅れて発展したアジア社会の特色として、ブルジョア民主主義運動の担い手は急速にプロレタリアートに交代する。吉野や福田徳三をいただいて出発した新人会も当然のこととして、社会主義的色彩をしだいに濃厚にしていった。赤松克麿・宮崎龍介・麻生久・棚橋小虎・佐野学・山名義鶴・山崎一雄・岡上守道（クロボトキンとレーニンをつぎあわせて黒田礼二というペンネームを使ったエスペランティスト）



新人会の機関誌『デモクラシー』（山崎一雄の文章を掲載）

……それらに続く一群の学生たち、
平貞蔵・新明正道・門田武雄・三輪
寿壮・嘉治隆一・林要・河西太郎・
河村又介・蠟山政道・波多野鼎・細
野三千雄・佐々弘雄・石浜知行・千
葉雄二郎・河野密・住谷悦治・小岩
井浄・細迫兼光・来間恭・風早八十
二・早坂二郎らの初期新人会の人び
とがそれである。

松尾尊允は、「五〇年前、吉野と
その周辺の学生たちは、朝鮮・中国
の学生と研究会をもつにさいし、日
本語で話すのは、彼らを対等に遇す
るゆえんではないと、エスペラント
の学習をはじめた」と書いている。
これがどれだけ事実の裏づけを持っ
たものであるかは、わたしたちは知
らない。しかし、同時に吉野自身の

言う「物にならなかった」をも顔面どおりに受取るわけにはいかぬ。吉野が、こうした場合の発言に「物になった」と公言するほどのバカではないからである。

吉野自身をおいて、その周辺の学生たちを洗ってみると、赤松・山崎・新明・岡上・小岩井・早坂らの名があがってくる。そこで、そのひとり山崎一雄から追跡をはじめてみる。

山崎は新人会の機関誌『デモクラシー』第一巻第七号（一九一九年十月）に「ザメンホフ博士とエスペラント」と題する評伝を書いた。念のために言うと、この年は米騒動の翌年であり、川崎・三菱両造船所大ストライキの年であり、山鹿泰治が秘密出版のかどでエスペラント運動最初の受刑者になった年であり、コミンテルンが創立された年である。

「国家主義がその赤裸々なる切り強盗の本質を暴露した恐ろしいポーランドの惨劇から半世紀を経た一八五七年、圧制のむちにしいたげられ続けたポーランドの小市ビエロストクに、わがラザロ・ルドビコ・ザメンホフは人類の悩みをその小さな生命の芽に背負って地上に生れ出たのであった」

ここには、黒板勝美の談話を筆記したという堺利彦よりも、はるかに鋭い形で帝国主義と対決する姿勢が見られる。残念なことは、吉野の文章を見つけることができなくて、それとの対比を試みるわけにいかないことである。

「すなわち国際語は、単に機械的な構造さえあればそれで良いというものではなく、人類が共通の言語を有するためには生きたる人類の精神をもってこれを結びつけねばならない。世界の民族

が手を取りあって平和なる社会を地上に実現する意志があつて、はじめてエスペラントは生きてくる。エスペラントを用いるものは、この精神を体得せねば十分効果をあげることができないであらう」

ザメンホフとともにこう確信して山崎はその展望を述べる。

「大戦の後、エスペラントは燎原の火のごとく、世界を風靡せんとする勢いが明かに見られる。わずかに二十文字と十六則の文法によつてなる簡単なる言語の組織は、普通の人々が二週間で十分学習し得る。ザメンホフが高調した人類同胞の精神に共鳴したとき、我らはエスペラントをもって世界の民族と心を開いて語る希望を禁ずるを得ない」

この年の十二月に『先駆』と改題して La Pioniro とエスペラントの副題をつけることになる『デモクラシー』は、それまでの各号の表紙に、ルソー・トルストイ・マルクス・クロボトキン・リンカーンの肖像を掲げていたのであるが、ここにおいてザメンホフをもそのパンテオンの祭神のひとりに入れることになる。次号につづいたのはローザ・ルクセンブルグである。

「フ・ナロードと叫ぶ者なし」という啄木の嘆きは過去のものとなり、新人会に結集した青年たちを先頭にして日本の急進的インテリゲンチヤは先を争って人民の中へ入っていった時代であった。しかも「人民の中へ」という叫びそれ自体が自らを人民と区別するエリート意識に支えられていたのである。エスペラントを二週間で習得するためには、それ相應の語学的素養が必要であり、「普通の人」では不可能であった。ここに転向と曲折がはじめからひそんでいた。

山崎一雄その人で言えば、創立間もない日本共産党から派遣されてモスクワに行き、一九二二年の

冬から翌年六月までプロフィンテルン（国際赤色労働組合）の執行委員代理として働き、関東大地震後の、また共産党解党状態の日本へ帰り、政治研究会・労働農民党を経て、社会民衆党の機関紙部長などとして働き、戦後は再建社会党の第一期機関紙部長を勤めたりした。

東北大学名誉教授新明正道は、山崎から紹介された宮本の質問に対して次のように答えている。

「当初機関誌は『デモクラシー』と号していたのだが、一九二〇年改題して『先駆』としたときにエスペラントの『ピオニール』という副題をつけたことから考えますと、そのころエスペラントに対して会の内部で多少関心を持つものがあったことは事実です。だれがイニシアチブをとったか不明ですが、たしか『先駆』を発行していたころ、私も牛込の小坂さんのお宅に仲間といっしょに参上して、種々お話を伺ったことを覚えています。……私の知る限り、小坂さん訪問を提唱したのは赤松克麿君でして、同君が事実上初期のリーダーだったので、エスペラントとの結びつきも同君を中心として生まれて来たのではないかと考えております……」

断定的に言うことはひかえねばならないが、年代的に少しずれているらしい新明の記憶のとおりとすれば、初期新人会とエスペラントとの結びつきは、吉野作造の娘婿である赤松克麿を通じて行なわれたことになる。赤松は本願寺の大坊主赤松蓮城の子として、その弟五百麿（いほまろ）が関西でしばしば演説していたように「七人の兄妹はお布施によって育ち、左翼へ走った五百麿（もっ）とも後にはこの人も国家社会主義に転向した」を除いてその兄弟のうち二、三とともに右翼社会民主主義系統の中で活動した。克麿が「第一次」共産党の解党派の主唱者のひとりであり、社会民衆党の創立者として科学的日本主

義をとなえて志賀義雄に批判されたり、さらに国家社会主義に転向したりしたことは、戦前の社会運動史にくわしい。今日ほとんど忘れ去られた「赤旗の歌」の訳者であったり、その主宰する雑誌『解放』に *La Emancipo* と、いう副題をつけていたことなどを知る人も、すでに残り少なくなっている。

その他、すぐれたジャーナリストとしてドイツ革命のルポルタージュを書いた黒田礼二こと岡上守道、ウエルズの大冊『世界文化史大系』の翻訳をこの世に残して愛人を抱いて雪中に凍死した早坂二郎、それに後述の小岩井浄など、エスペラント運動に活躍し、または接触を持っていた新人会員のなかから、便宜上筆をとばして、守随一の名をあげたい。新人会のずっと後年の会員であったかれは、山崎・赤松などの先輩とはちがって、エスペラント運動そのものの中でよく働いた人である。

敗戦の色も濃くなった一九四四年十二月、日本エスペラント学会の機関誌 *La Revuo Orienta* は、雑誌統合による休刊を告げたあとで、その片すみに次のような短い記事を掲げた。

「守随一氏（新京）一月十五日チブスでなくなられた。元学会評議員。成蹊エスペラント会・浦和高校エスペラント会の育成その他エスペラント運動に対する功績が多かった。東京帝大経済学部を出て満鉄に入り、土着資本その他経済調査に従事、多くの仕事を残された。二月十四日鶴見総持寺に葬られた。四十一歳」

このなにげない記事こそは、植民地憲兵隊が満鉄調査部の旧左翼を陥れるためにむりやりデッチ上げたところの、いわゆる満鉄事件で殺された犠牲者を弔うせめてもの言葉であった。かつて大杉栄の虐殺にさいして、一行の記事すらものせずに国際的にも醜名を伝えられている同じ雑誌の別の編集者の仕事であった。

そして一九六七年十一月十一日、ベトナム侵略とアメリカ追隨の日本政府に抗議して由比忠之進が焼身自殺したとき、この雑誌の「由比忠之進追悼号」(一九六八年一月号)で松本健一(評論家で同名の人があが、これは別人)は次のように書いた。

「満鉄調査室から多くの人が思想関係で捕えられる事件があり、由比氏の話では、守随一氏もその一人で、後にチブスにかかり、釈放されたときには、奉天の同志安部先生を訪ねたが、手当を拒否され、ついに手遅れで亡くなった、と例のむきになった顔つきで同志らしくない態度と安部先生のことを憤慨していました」

この診療拒否をやつてのけたエスペランティスト安部浅吉が、実はこれもエスペラントをかじつた、わが日本の代表的作家のひとり、安部公房の父である。この小心の医師の背後にのしかかつていたのであろう植民地警察の黒い手を使うとき、わたしたちは熱血漢由比のように單純に怒ることができぬ。しかも、安部浅吉は開業医としての経験が浅く、チブス患者の手当てをする自信がなかったのだろうとも思われる。しかし、それにしても、安部の態度が感心できるものでないことは動かせない事実である。屈折した時代の鏡の前において、なおかつ、こう言わねばならないことは悲しいことではあるが。もっとも、公房にはなんの関係もないことである。ついでに小山弘健の話をつけ加えると、守随はいちばんおそくに捕まり、いちばん早く死んだのだと言う。学生時代からいかに弱々しい人であった。

盲目の詩人エロシエンコに魅せられて

これも新人会の会員である河合秀夫は、一八九六年、三重県の酒造家の長男として生まれ、東大農学部で応用化学を学び、卒業後、家督を弟に譲って農民運動に入った。と言っても、やはり金に不自由しなかったらしい。嘉治隆一・細迫兼光・河野密らが作った雑誌『社会思想』の保証金を出したのもかれであるし、高橋貞樹や木村京太郎の乞いにまかせて、水平社青年同盟の機関紙『青年大衆』——のちに改題して『無産青年』となり、全日本無産青年同盟、ついで日本共産青年同盟の機関紙になった——の保証金を作ったのも、わが河合秀夫であった。新潟県木崎村の大争議を三宅正一とともに指導、『社会思想』の主流派とはなれて労働農民党にとどまり、一九二八年の最初の普選には、三重県第二区から立候補、落選。その後、全国農民組合兵庫県連合会委員長を経て、総本部常任委員となった。一九三〇年には社会民主主義政党支持を強制する本部派に対して、前川正一とともに奮闘し、前川が屈伏したあとでもただひとりの正義派として、ついに本部常任を解任された。しかも、農民委員会方式を主張する共産党農民部指導下の全農全国会議派の方針にも賛成できずに、ついに運動から引退することによって、自己の信念を明らかにした。その後、理化学研究所研究員を経て、戦後、三重水産大学教授などを勤め、奈良や松阪でエスペラント運動と日中友好運動に活動、一九七二年に死去した。

その河合自らに語ってもらうのは「エロシエンコに魅せられた私」である。以下、少々長い引用文。

大正九（一九二〇）年秋晴れの日、上野竹の台で開催中の第二回帝展（帝國美術展覽會）をふと見たくなったので、学校の化学実験をサボって、ひとりで出かけた。開会後三、四日だが、相当数の入場者で、その間をぬっているいろいろな傾向の絵を見て歩くのでかなり疲れた。その中で、中村ツネ作『エロシエンコの像』というルバシカ姿の盲人の半身像に不思議に魅力を感じた。幾度もその前にもどって、飽かずに眺めた。絵にこんなに感動したのは初めてだ。（略）

やがて新聞は『エロシエンコの像』が特選になったことを報じた。（略）

年が明けて大正十（一九二一）年の早春、本郷上富士前の新人会合宿で、新人会創立二周年記念祭を挙行政した。多くの思想家や労働運動家に交って、数人の中国と朝鮮の学生が加わり、大いに国際的雰囲気（かんいき）を濃厚にしていた。まず中国の学生が「新人」という詩を朗読して拍手され、朝鮮の学生が朝鮮における日本帝国主義の暴状をバクローして満座の共感を得た。

吉野作造博士から借りてきたビクトロラでベートーベンの第五をかけておると、無帽で来た晩民会の高津正道氏が憤然として立って「僕は今日学校（早大）を放校された。新人会の諸君、こんな生温い空気ではダメだ。労働者はベートーベンなど聞く余裕はない。僕は別の会合があるからこれで失敬する」とこきおろして行ってしまった。

「エロシエンコ」という声がしたので、入口近くにいた私はすばやく飛んで行くと、帝展肖像画の主（し）の長身の西洋人が盲人の学生に手を引かれてはいって来た。（この学生は現京都府盲人協会会長島居

傳治郎氏であることを数年前の日本エスベラント大会で知った）

私はその学生に代わってエロシエンコの手をとった。大きな温い手だ。床を上がって奥の方にみちびき、適当な場所に座らせた。彼は流ちょうな日本語をあやつった。

やがてエロシエンコは携帯のバラライカを弾じながら、いくつかの歌を歌った。「革命家の死を葬う歌」「友人のシベリア流刑を見送る歌」「失敗した蜂起の歌」等々。ロシア語の歌詞は解すべくもないが、豊かなよく澄んだ声は切々として人の胸にくい入った。一人の学生はつぶやいた。「僕は音楽をやっておるが、日本の専門の音楽家と称する人たちよりうまいね。エロシエンコは立派な音楽家だよ」と。他の一人は歎息した。「ロシアには革命に関する歌だけでも沢山あるね。革命に成功するにはこれ位でなければいけないのか。」

その幾日かの後、神田のYMCA大講堂で晩民会主催の社会問題講演会が開かれた。エロシエンコも弁士として出るので、私は期待をもって出かけた。開会の六時には階上階下二千の座席はぎっしり詰まった。皆エロシエンコを聞きに来たのであった。あご紐をかけた警官がとくに演壇付近に密集していた。出る弁士も出る弁士も、「注意」「中止」の連発で、殺気立った。「警官横暴」「かまわぬ、続ける」と怒号が飛ぶ。幾人目かに学生に手を引かれてエロシエンコが登壇した。まず聴衆に許しを乞うて椅子に腰を下し「禍の盃」という演題でしずかに話はじめた。

その時のエロシエンコの演説は、言葉の一つ一つが詩であり、シャンデリアの光に照らされて襟元までかぶさった金髪は絵であり、金の鈴をふるような声は音楽であった。そして三者が渾然と統一して一個の芸術品であった。歴史に残る名優の演じた舞台の一コマであったといっても過言では

ない。私は何とも言えない感動をもって下宿に帰った。

その後一か月半、エロシエンコはボルシェヴィズムを宣伝する危険な外国人として、警察の手によって、野蠻きわまるやり方で日本から追放されてしまった。もとより何の根拠もない。詩人の呑気さで社会主義者と往来したり、メーデーに出て検束されたりしたのがわざわざいしたのだ。

私はその秋、大学を出て村に帰り、新人会のスローガンのフ・ナロード（民衆の中へ）の運動を真剣に始めた。しかし処女地の固い土に私の鍼は深くはいらなかった。わずかに獲得した農村青年のMは、エロシエンコの「夜明け前の歌」や「最後の溜息」をもっとも好んで読み、私の語るエロシエンコについての貧しい知識に熱心に耳を傾けた。そして私と彼に村の医師を加えて三人でエスペラントの学習を始めた。二人はエスペランティストとして大成しなかったが、のちMのすすめによってMの友人Cがエスペランティストになり、Cが中心となって多くの同志を組織した。

一年後、家業を弟にゆずって村を出た私は青春の情熱を天皇制の弾圧下の農民運動に燃焼した。老いて死を待つ今では、歴史の進行を確信しつつエスペランティストとして生きておる。同じ長男のMも家を妹に託して村を去ったが別の道を行った。このようにエロシエンコは、あの時代の燃えやすい青年の心に火を投げかけた。

私は数年前、高杉一郎氏編さんの『エロシエンコ全集』を、三十何年ぶりで読み直してみたが、昔のような強い感激をもつことができなかった。何故であらうか。一つは老いた心は鈍感になったのだらう。しかし最大の理由は天皇制の重圧下で、用いることを強いけられた暗示的象徴的な言葉は、今日の制限されない自由な表現に比較すると白日夢的印象を与えるのではなからうか。

「すべての社会主義者はエスペランティストであるべきだ。またすべてのエスペランティストは社会主義者であるべきだ」というエロシエンコの言葉は、今も私のもっとも好きな言葉である⁽⁴⁾。

必ずしも文筆の人ではなかった河合の語る話は興味深いが、もうひとつのエロシエンコの媒体について述べる必要がある。それは河合の文章の中にも出ている長谷川如是閑と大山郁夫の雑誌『我等』である。

「浪人会一派の『デモクラシー撲滅』運動はまず大阪朝日新聞社に向けられた。当時の『大阪朝日』は関西のみならず日本におけるデモクラシー運動の機関紙たる観を呈した。その論説、新進諸学者の寄稿等はまさに日本の新思想の代表たる観があった。浪人会一派が『大阪朝日』を不倶戴天の敵としたのは、かれらとしては、まったく好敵手を選んだものである。かれらは『大阪朝日』はわが国体を破壊する謀叛^{（謀反）}を企てるものであると宣言した。自ら『大阪朝日新聞破壊運動』と称した。かれらは『大阪朝日』のアラを丹念にさがし、たまたま同新聞のある日の論説のうちから『白虹日を貫く』という一句を発見するや、これを口実として、最後の直接行動に出た。大正六年夏の一日、大阪朝日新聞社長村山竜平氏は老軀^{（こく）}を縛せられ、『大不忠漢』の立札を付されて、白昼の大道に投げ出された。元来、新聞企業家以外の何者でもない村山氏は、浪人会一派のこの一撃に屈して、『大阪朝日』編集部を改造し、鳥居、長谷川、大山の諸氏は昨日までのデモクラシーの牙城から退却するのやむなきにいたった⁽⁵⁾」

これも一九一八年のこと。このとき、頭山満・内田良平・寺尾亨らの浪人会（頭山・内田の両人が後

に出口王仁三郎の昭和神聖会に協力することを、いまだ一度思い出して欲しい」の圧力で、朝日をクビになった鳥居素川らは『大正日々新聞』を創刊し、一九二〇年に経済的破綻から出口王仁三郎に譲渡するまで、この新聞に立てこもる。一方、長谷川如是閑は大山郁夫とともに『我等』を創刊し、鳥居らとの協力のもとに、なおもデモクラシーのために論陣を張った。榊田民蔵・佐々木惣一・河上肇・今井嘉幸・吉野作造・千葉亀雄・高野岩三郎・大内兵衛・矢内原忠雄・細川嘉六・森戸辰男・嘉治隆一・三輪寿壮・細迫兼光らがこの雑誌の協力者となった。

大山を発行名義人とする『我等』の編集にあたったのは、エスペランチストの福岡誠一であった。戦後、長い間『リーダーズ・ダイジェスト』日本版の編集長を勤め、現在も同社のエライ人である福岡に、かれの当時の思想を聞いてみることは出来ぬ。しかし、どうせ高給で雇われたわけではあるまいから、雑誌の紙面に見るとおり、かれも如是閑同様の進歩的自由主義者であったのであろう。

この『我等』の第三号、つまり一九一九年三月号に「エスペラントの沿革」を書いたのが、なんと藤沢親雄、戦争中に国民精神文化研究所なるものを主宰し、戦後は「進駐」してきたアメリカのジャーナリスト、マーク・ゲインに向かって、「わたしは反動です」と公言して、その度胆をぬいた藤沢であった。三十年の歳月は、いかにも無情なものである。当時の藤沢は、森戸辰男と同じように、保守でも反動でもなく、それが「民主主義」でないという意味において、「民本主義」の使徒であった。同じ雑誌の同年九月号に「エスペラント練習の経験」を書いて、「だれかが、エスペラントは民主的のラテン語だと言った。おもしろい言葉だと思う」と、レーニンに帰せられている「プロレタリアのラテン語」をもじって言っているのを見ると、なおさらこの感が深い。もっとも、レーニン自身はこ

んなことを言っていないのであるが。一九三〇年代の藤沢は、こんな「民主」というような「国賊」的単語を使うような人ではなかったのだから。

同じ藤沢が「ウラジオまで」という興味あるルポを『我等』の一九一九年十二月号に書いている。白軍占領下のウラジオストックに旅行して、その地のエスペラント会をたずね、さらにエスペラント研究グループのある捕虜収容所を訪問し、オーストリアやハンガリーの捕虜エスペランチストと交歓する話である。

しかし、藤沢を語るのはこの本の目的ではない。『我等』のもっとも有力なる寄稿家としてのワシリ・エロシエンコのことを語りたいのである。

ワシリ・ヤコブヴィッチ・エロシエンコは一八九〇年、ウクライナのアブホーフカ村の中農の子として生まれ、四歳のときに失明、モスクワの盲人学校を一九〇六年に卒業、ロンドンの王立盲人音楽学校でバイオリンを学んだ。一九一〇年にロンドン近くに住む亡命アナキスト、ビョートル・クロポトキンと会っているが、この時代には単なるヒューマニストにしかすぎなかった。かれが社会主義的傾向を示しはじめたのは、一九一四年、東京に来てから後のことである。かれを社会主義者にしたのは、直接には高津正道・小野兼次郎・福田国太郎・神近市子、さらに大杉栄たちであったが、広く言って、かれのなかにあったウクライナ人をふくむ被圧迫民衆の心情であった。一九一六年のシャム（今のタイ）・ビルマ・インドへの旅行、そこからの「危険なボルシェビキ」としての追放、日本再入国、そして一九二一年五月二十八日、新宿中村屋の二階から引きずりおろされての日本追放。

シベリアを経て、一九二二年二月には北京にはいり、魯迅やその弟周作人と協力して、その地のエ

スベラント運動に尽力し、北京大学や上海労働大学でロシア文学史をエスベラントで講じ、一九二四年から二七年にかけては、モスクワに帰って、クートベ（東洋労働者共産主義大学）で、日本人の留学生（春日庄次郎・袴田里見・風間丈吉やスパイM松村）として有名な飯塚某をふくむ人びと）のために通訳として働いた。春日の回想によると、ロシア語に閉口した日本人留学生の要請で、クートベ当局がウクライナに帰っていたエロシエンコを呼びよせたのだと言う。この「労働者農民の祖国」でエロシエンコが見えぬ目で見たものは、必ずしも全部が全部バラ色でなかったことは、想像にあまりある。神近市子は、四方堂という本屋から（一九二六年四月から）たしか三、四号出ただけの『エスベラント文芸』という日本語の雑誌の創刊号で、「帰国後、白系エスベランチストと交際するので、片山潜さんなんかに忠告されているそうだ」とさりげなく書いていた。もともと反対の記述もある。秋田雨雀は一九二七年十一月七日、赤の広場で会ったエロシエンコを「マルクス主義者ではなかったが、東洋の革命家たち、日本の初期の社会主義者たちに共感した……疑いもなく彼は進歩的な人間で、性格において革命家であつた」と言っているし、春日庄次郎も同じようなことを書いている。エロシエンコがクートベの通訳をやめた事情は、春日によると、留学生たちがロシア語に上達してきたからだと言ひ、社会科学の用語に暗いエロシエンコがあまり役に立たなかったからではなからうかという高杉一郎の想定との二説に分かれる。おそろく両方とも本当であらう。

エロシエンコは一九三〇年代には盲人協会で働いていたが、これより前二八年にはシベリアの北端、チュクチ半島へ旅行している。第二次大戦の間にはトルクメンの古い町クシユカに住んでいて、四五年にモスクワへ、四九年には故郷の村へ帰った。「市民ワシリー・ヤコブヴィッチ・エロシエン

コは一八八九年十二月三十一日に生まれた。出生地はベルゴルドスカヤ県スタロ・オスコルスキー郡アブホーフカ村で、一九五二年十二月二十三日死亡し、同地の共同墓地に葬られた⁽¹⁰⁾。というのは、同村ソヴェートによる調査である。

エロシエンコがクートベで働いていたことを私たちが知ったのは、戦後、風間丈吉の書いた本⁽¹¹⁾によってであるが、伊東三郎あたりは当時から知っていたらしい。おそらく、共産党中央部に働いていたかれは、風間、あるいは松村あたりの口から聞いたのであらう。「帰国後、教育関係の仕事をしている」と伊東の『日本エスベラント学事始』には暗示的に書かれている。和田軌一郎あたりも知っているたであらう。同じくクートベで通訳もしていたし、ともにエロシエンコの故郷へ旅行した仲でもある。しかし、さすがにこの和田というアナキストは立派で、帰国後もこの日本革命のための士官学校の内状については書かなかった。

エロシエンコの日本での著作活動は、『我等』『種蒔く人』『朝日新聞』『改造』などの新聞雑誌にわたっており、『夜明け前の歌』『最後の溜息』という二冊の本にまとめられている。その相当部分は、日本語で直接語られ、かれの友人たち、とくにかれが恋情を抱いていたと思われる神近市子によって書きとられて発表されたものであるが、その中心をなす次の三編はいずれもエスベラントで書かれており、S・F生と名のる福岡誠一によって翻訳されている。「わたしの盲学校生活のページ」というのは、失明したがゆえにかえってこの世の不正を見ぬくことができた、ツァールとその官僚たちを痛快に笑いとばすものであり、「枯葉物語」は、中国の民衆に限りない同情と連帯を示して、帝国主義列強のくびきを打ち破れと訴えている。もうひとつの「落ちるための塔」は、体面を尊重するあま

り真の人間味を失った中国の土豪の愚劣さをあざけったものである。⁽¹³⁾

エロシエンコは日本や中国の作家たちに愛され、魯迅などによっていち早く中国語に訳された一面、その祖国では、スターリン主義と呼ばれる人間性をしめ殺す圧制のもとに、長い間黙殺されてきた。エロシエンコが正当な評価をされるようになったのは、スターリン死後の「雪どけ」になってからである。数年前に出たウクライナ語の作品集は国立出版所から発行されるや、たちまち売切れて、最近増訂版が出た。ロシア語版も出ているそうだが、まだお目にかかっていない。ソ同盟でのエロシエンコ研究熱は相当のものであり、とくに日本で書かれた日本語の作品を求める声が高い。

なお、福岡誠一は『我等』誌上を、藤沢やエロシエンコに提供しただけではなく、自らも初等講座その他を書いた。

暗黒から光明へ——秋田雨雀

「私は東京へ着いて、翌日から生活費を調達しなければならなかった。私の家庭はこの三月、厳格に言えば、半年の間ほとんど定収入なしに暮らしていた。二人の私の兄は、餌をくわえて帰る親鳥を待つように私を待っていた。私はこの旅行中に名目上ではあったが、数千円の興行上の借財を背負うて帰ったが、実際上の責任者が責任を回避したために、ほとんど毎日のように債権者の督促に苦しめられた。私は自分の愚劣をあざけり、人生の冷酷を怒った。もし、この時代に、二、三の

友人が私を激励し、私の生活に刺激を与えてくれなかったら、私はあるいは自殺をとげていたかも知れなかった。

ワシリー・エロシエンコが私の前に現われたのはこのときであった。……私が全く人生に絶望して極端にニヒリスチックになっていたとき、エロシエンコが盲人でありながら、世界のエスペラント運動のために熱心に働いているのを知った。私はすぐにエスペラントの勉強をはじめた。私は三月ほどではぼこの言葉を習得した。私はこの言葉を知ったおかげで、人生を別な眼で見る事ができた。そしてたくさんさんの仕事が私の前に現われてきた」⁽¹⁴⁾

一九一五年、東北・北海道へ劇団「新時代劇」一座を連れて巡業して来た秋田雨雀は、こんな日記を書いた。この年代のエロシエンコは社会主義者であったとは言えぬ。秋田も似たりよったりである。ペルシャに起こった新興宗教バハイ教がエロシエンコや雨雀の心をゆさぶったのであった。日本ではアメリカのブルジョア娘、アグネス・アレキサンダーがこの宗教の宣伝に従事していたのであるが、たぶんアルバイトとしてであろうが、エロシエンコは、この宗教の宣伝パンフレット『バッハ・ウラーの隠語録』のエスペラント訳をしているのである。エロシエンコが雨雀のための救世主の役割を演じ得た一因に、雨雀の父が失明していたこともあずかって力あるだろう。もしも、かれの住む雑司ヶ谷の家の近くの、友人の下宿に泊まっていたエロシエンコと出会わなかったならば、雨雀はどうなっていただろうか。いや、雨雀その人だけではなく、この劇団の赤字の実際上の責任者——のちに新国劇を創立する沢田正二郎か、まさか、のちに西光万吉の協力者となる倉橋仙太郎ではあるまい——の運命まで狂わしてしまったかも知れぬと考えると、ちょっと痛快でもある。

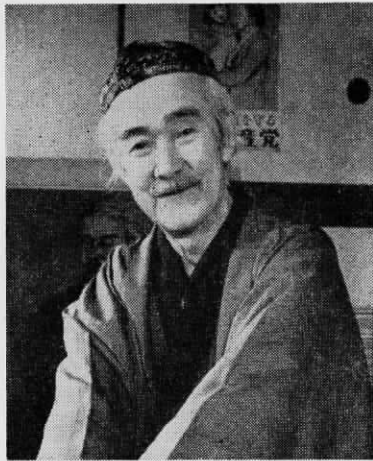
ともあれ、雨雀も思想的転換をとげはじめる。暗黒より光明へ。人道主義から社会主義へ転換するには、怒りの炎を点じるだけで十分である。

「かつて人間は神を作った。今や人間は神を殺した。作られたものの運命は知るべきである。現代に神はいない。しかも神の変形はいたるところに充満する。神は殺されるべきである。殺すものは僕たちである……」

村松正俊の起草になるこうした宣言——それは削除されながら相坂侑のエスプレント訳とともに毎号掲げられるのであるが——を掲げて、一九二一年十月、雑誌『種蒔く人』が東京で再刊された。この年の二月、秋田県土崎で創刊された雑誌が、東京で再出発したのであった。反戦平和、第三インターナショナル（コミンテルン）支持を公然と訴えたこの雑誌の中心に立ったのは小牧近江（こまきちかみ）である。政友会代議士の子で、フランスで学んだ外務省の現役の役人である。金子洋文・今野賢三（いまのけんざ）らが最初の同人であり、再刊に際して村松正俊・佐々木孝丸・柳瀬正夢（やなぎせまさゆめ）らに参加した。特別寄稿者としてあげられているのは、秋田雨雀、有島武郎、アンリ・バルビュス、馬場孤蝶、エドワード・カーペンター、クリスチャン・コルネリセン、江口渙、ワシリー・エロシエンコ、藤井真澄、藤森成吉、福田正夫、アナトール・フランス、ポール・ジル、長谷川如是閑、林俊衛、平林初之輔、石川三四郎、神近市子、加藤一夫、川路柳虹、宮地嘉六、宮島資夫、百田宗治、小川未明、ポール・ルクリュ、白鳥省吾、富田碑花、山川菊栄、吉江喬松である。つまり自由主義から左へ、アナもボルも共同の所帯である。このうち翌年の「第一次」日本共産党結成に参加したのは、平林と山川だけであろうか。のちに共産党で相

当重要な仕事をする青野季吉はまだ顔を出していない。

『種蒔く人』が胎動期、あるいは受精中のころ、エロシエンコは日本官憲の手によって捕えられ、危険分子として追放されることになる。有島武郎とともに警視庁へ抗議に行った秋田雨雀の弁明に対して、「そうです。その詩人であることがいけないのです」と取締責任者がうそぶいたのであった。われわれもくりかえそう。「そうです。真実を見つめる詩人であることが、この世の秩序を乱すのです」と。



秋田 雨雀

「先生はブルジョア社会の、カサブタのような醜い窮屈な教育を憎んで、その最愛のひとりの娘さんを学校に託するに忍びず、自分の家でいっさい教育された。このお嬢さんは全く幸運にもブルジョア教育のいっさいの偽善的な悪習に染まっていない。だからエスプレントストに対しては、どんな人ごみの中でも、どんな会場でも、なんらの偽善的なはにかみもなく、きわめて天真ランマンにエスプレントで話しかけるのである。日本に婦人エスプレントの数は少なくない。だが、このような日本人はなれした立派な女性エスプレントは不幸にも他に一人も見あたらない」

伊東三郎はこう言っている。雨雀自身の語るところ

では、「毎日三時間以上を子供の教育のために費した」と言うが、ブルジョア教育を避けるために学校へ全然やらなかったとは書いていない。この娘はのちにロシア文学者上田進の妻になり、上田が『静かなドン』を訳しているときに女の子を生み、その翻訳にちなんで静江と名づけることになる。この静江が自殺して、家族に恵まれない雨雀を悲しませたことを、今もおぼえている人が多いだろう。

「アジアにつづく北欧の

ロシアの民を君見ずや……」

と荒畑寒村作るところの歌を歌っていた雨雀は、一九二七年、ロシア革命一〇周年にさいして、ソ同盟政府から国賓として招待された。芥川竜之介の自殺のあとである。秋田は、この国ではじめてエスペラントが生きていることを体験し、またソ同盟の人びとに体験させた。あるいはピオニールと語り、オーストリアの老人と語った。この老人は守随一・須々木要が翻訳した秋田の戯曲集『骸骨の舞跳』を持っていた。翌年の二月にはクレムリン近くの放送局からエスペラントでラジオ放送をした。スターリンがまだブハーリンと併称されている時代で、エスペラント運動、とくに革命的エスペラント運動にとっては蜜月の時代であり、数千と言われるエスペランチストがソ同盟にいたのであった。スターリンの弾圧のもとに、多くのエスペランチストがラーゲリに送られるのは、まだだいぶ先のことであった。秋田はいたるところでエスペラントで話し、エスペラントで学んで帰った。この旅行は『若きソヴェートロシア』なる旅行記を生んだ。

帰国後、秋田は国際文化研究所の創立に参加した。それはやがてプロレタリア科学研究所に発展する。日本プロレタリア作家同盟・日本プロレタリア劇場同盟が創立された。ソヴェート友の会や解放

運動犠牲者救援会もできた。日本プロレタリア・エスペランチスト同盟もそのうちに出現する。これらのいずれの会も、あるいは発起人として、あるいは委員長として、秋田の名をきそって利用した。秋田は喜んでそれに乗った。乗っかるだけの器量、かつがれるだけの名声をそなえていたし、かつがれることで運動に貢献することを自覚している人であった。

そして弾圧の時代。雨雀も三三年には検挙されねばならなかった。もちろん、たたいでもホコリが出る人ではない。しかし治安維持法はそれすら許さなかった。赤色労働組合、全協（日本労働組合全国協議会）はおろか、左翼文化団体はそれ自身でこの悪法の餌食になるような活動形態をとることに努めていると思われるかもしれない状態であった。運動全体が屈伸性を失って、文化団体や労働組合が前衛党と異ならないようなスローガンを掲げていたのである。雨雀も転向を誓った。それが大きな苦痛であったかどうかは、日記をのぞいてみるかぎり、島木健作の場合と比べることはできぬ。両者の運動への関わりあいの深淺によるものであらう。

戦後、雨雀は疎開先である故郷の青森で、淡谷悠蔵（のち社会党代議士）などとともにエスペラント運動をはじめ、「エスペラントの家」を作り、講習会をはじめた。この地は今でも地方都市としては運動ののびているところである。

青森県知事に社会党から立候補した。県労働委員にも選ばれた。この地でいち早く復活した運動は、まず社会党再建の形をとり、大沢久明をはじめとして、かつての共産党員の大部分がまず社会党に属していたのである。雨雀もそれに同調した。そして、この傾向は全国的なものであった。のちの大阪の共産党代議士横田甚太郎（かれがプロレタリア・エスペラント講習会の中で現夫人と知りあったことは、

瀬長亀次郎夫妻のケースと同様である。もそうであった。これらの人びとは機を見て、ふたたび共産党へかえった。大沢久明代議士は「共社合同」運動の立役者になった。しかし、相当多くの地方では、そのまま社会党に根をおろしてしまった人が多い。和歌山県の社会党の戦前派の圧倒的部分が元の全協の活動家であることなどは、その一例である。これにはいろんな問題がある。議員病とセクト主義と言えば、問題を少し簡略化しすぎるであろう。東京へ出て、舞台芸術学院の院長になっていた、わが秋田雨雀も共産党へはいった。

『種蒔く人』の活動家——佐々木孝丸

面魂つたましという日本語がある。佐々木孝丸と対面さまたかしていて受ける圧迫感おさは、まさに、このツラダマシになるものからであろう。「白き手のインテリ」のうちに孝丸を勘定することはできぬ。かれは通信労働者の出である。もっとも、かれの父は僧侶であって、きつすいの労働者出身と言えないのであるが。この面魂を頭において、孝丸がやった職業を思い浮かべてみよう。通信労働者としては電報のキイをたたきつづけ、フランス文学者としてはマルセル・マルチネの『夜』やアンリ・バルビュスの『クラルテ』を訳し、俳優としてはカイゼルやダントンの昔から現在でのテレビの悪役、暴力団長、家老、参謀長をやつてのけ、落合三郎の名では『筑波秘録』などの大衆小説を書き、本名でたくさんのアジプロ劇を書き、叢文閣の編集者として松崎克巳訳『愛の人ザメンホフ』や秋田雨雀・小坂狷二

共編『模範エスプレント独習』をこの世に送り、演出家としては左翼演劇はもちろんのこと、新国劇や宝塚で働き、その他何でもこいであって、一時のアダ名「エンサイ」のとおり、落丁の多い百科事典そのものといった人物である。『レーニン著作集』（白楊社版）の一冊は、たしか青野季吉・佐々木孝丸共訳になっていたと思う。「日本のダ・ヴィンチ」トムこと村山知義の向こうをはらうというもの。しかし、村山でさえやっていないことを、わが孝丸はやってのけているのである。クレランドの名作『ファニー・ヒル』の最初の翻訳はかれの手になる。

佐々木の名誉回復に役立つかどうかは怪しいが、かれ自身の語るところと、筆者の調査をからませていきさつを書くと――

反骨のエロ本出版者・作家の梅原北明——「第一次」共産党の関係者らしい——の協力者のひとりに上森健一郎という人がいた。日本労働組合評議会の関東出版かなにかの活動家であったが、ふとしたことから、この道に入りこみ、後には梅原と離れて独自にエロ本出版をはじめて勇名をはせる人であるが、この上森が佐々木をたずねてきた。『ファニー・ヒル』を翻訳して、その印税を評議会の活動資金に回してくれ、というのである。大義名分に不足はない。一石二鳥と考えた佐々木は昼夜兼行かどうかはわからぬが、とにかく一気呵成かっせいに訳した。そして――

一九二八年の一月のある日、三・一五事件の二か月前のことである。梅原から小包が届いた。ハハア、できたな、と思いながら――佐々木の言葉を信用すれば――それをあけてもみないうちに、高等課ならぬドロ刑がふみこんできて、直ちに小包もろとも警察へ連行された。

「いやあ、あのままでは不穏当だから、出版社の方で適宜に削って欲しい、と言っておいたのに、

そっくりそのまま出すとはもつてのほか」

とそこは俳優が本職で、すらすらと弁解が通って佐々木は釈放。梅原だか、上森だかがやられたわけであるが、この訳本、先年、吉田健一訳が問題になったとき、だれであったかは忘れたが、批評家のひとり、佐々木訳の方がはるかに情緒を伝えている、と推奨したことがある。佐々木自身は、表紙を警察で見ただけで、現物はついに——と言っているが、信じていない神様も知るまい。いま市場に出れば数万円のシロモノである。ともあれ、この翻訳はあとまで孝丸にたたった。労働芸術家連盟と分裂して、その折衷主義をたたくと、「ナンダ、エロ本の訳者のくせに」とシッペがえしをくったのである。

この佐々木が同時に「起て、飢えたるものよ」ではじまるインタナショナルの訳者であることを、若者たちはもう知らない。それほどこの歌は日本人の中に定着しているのである。このインタの訳に二種類あり、はじめのもの、今では忘れ去られた方が孝丸単独の作品で、現行のものは、オタマジヤクシを読めない孝丸と、のちにソ同盟に亡命し、そこからスターリン政権に追われてメキシコに走り、その地で客死する運命になった佐野碩——佐野学のオイであり、同時に田中清玄とともにいわゆる「武装共産党」を指導した佐野博のイトコ——との共訳になるもの⁽¹⁸⁾。

「マルチネの『夜』には全く頭を打ちのめされた。『アンヌ・マリー、起きるんだよ。夜が明けたんだよ！』という最後のセリフなど、私は感極まって泣いた」と若き日の真船豊を感激させた『夜』と、以上のふたつは数ある孝丸の翻訳のうちで歴史に残るものだ、と言ったらギョロリとあの眼を光らせるだろう。

佐々木がエスペラントを勉強しはじめたのは一九一九年のこと。秋田雨雀に話を聞いて、小さい本を一冊もらい、雑司ヶ谷から赤羽橋まで一時間の市電の中で、文法の概略をおぼえた。「エスペラントってやさしいもんだよ。おれはもうモノにした」と放言すると、たちまち労働総同盟——左右分裂以前である——の学習会にひっぱり出されて講習せねばならぬ羽目に陥った。あわてて独習書を買ってきたが、わからぬことばかり。雨雀先生のところへ出かけて一日分を習ってきて、講義は一時間の持ち時間をたっぶりいっぱいやる。ヘンな質問に出くわすと、たちまち馬脚をあらわすからである。講義が終わると、電光石火、サッと引き上げて、また雨雀先生のところへ。「人間もたまにはホラを吹くといひものです」とは当人の話である。

一九二三年の春、岡本好次（のちの日本エスペラント学会専務理事）、石黒修（以前文部省教育研究所——現在国立教育研究所——にいた、豊川善曄^{ぜんよう}（沖縄の人で、エスペラント出版社を経営していた）たちと、東北・北海道へ宣伝旅行に出かける。各自が書き、または出版したエスペラント独習書を持ってくるのである。

同年、秋田雨雀・エロシエンコ監修として相坂佑などと名を並べて『自由エスペラント講義録』を日本エスペラント文化学会という名で出しはじめた。後年の『プロレタリア・エスペラント講座』の先駆である。たしか二冊まで出たようであるが、完成しなかった。二冊目には石黒修も書いていたように思う。

『種時く人』では革命的エスペラント運動の紹介をさかんに書き、種時き社主催で講習会を開き、大阪・秋田では文芸講演会で「世界主義とエスペラント」という題で宣伝活動を熱心に行った。エスベ

ラントの社会的地位が今日ほど低下されていない状況があったとはいえ、今昔の感にたえない。

『種蒔く人』は関東大震災のあとの反動期につづれると、『文芸戦線』として再出発した。佐々木が中心人物のひとりであることに変わりはない。そして、一九二五年一月号に「万国の革命的プロレタリア著作家に敬す」というアピールをのせる。「一九二四年七月十日、モスコにおいてコミンテルン第五回大会の代議員とともに、ソヴェート同盟における無産階級作家の会議が開かれた。この会議は満場一致をもって、各国における無産階級作家の強固なる国内的団結の必要を認め、かつ、それらの各団体が国際的な規模において団結すべきことの必要を認めて」というデミアン・ベッドスイやベジミョンスキーらの署名による訴えで、後の国際革命作家同盟（モルプ）結成への胎動を伝えたもの。これは佐々木が加盟していたサートの機関紙の帯封に「裏面注意」と印刷してあり、はがしてみると印刷されていたのであった。

佐々木はこの雑誌にボーランドの小説『ミカエル少年』やソ同盟の小説『鉄橋』などを訳している。佐々木と林房雄が中心になり、辻恒彦・蔵原惟人・中野重治・佐野碩らが加わった海外プロレタリア文芸研究班の仕事の一環であった。共産主義青年インタナショナルのアピールもエスペラントから訳してのせた。またエスペラントそのもので「社会主義的、共産主義的文学概論」を書きはじめて中絶している。『種蒔く人』時代にも何べんか中絶した実績があるのだが、「超国際的多忙のせい」だと編集者が言いわけしている。

さらに日本の日本無産階級エスペランティスト同盟の結成を企て、その暫定綱領を発表しているが、これは相坂佑をふくむ若干の参加者があっただけで、雄図むなく挫折した。これまた、のちのプロ

レタリア・エスペランティスト同盟結成の先づきである。⁽²⁰⁾

一九二八年のはじめ、日本共産党は無産者新聞の門屋博を表面に立てて、山川イズムと呼ばれる解党主義と絶縁したプロレタリア芸術連盟と前衛芸術家連盟の合同のあっせんに乗り出した。佐々木は前芸術派の代表者のひとりである。そして三・一五の弾圧で門屋はいなくなったが、両者は合同し、他の二団体をも加えて、全日本無産者芸術連盟が成立し、その機関誌『戦旗』が出はじめる。この団体は *Nippon-Artista Proletaria Federacio* というエスペラント名を与え、略して *NAPF*（ナッフ）というようになったのは、ナッフでは呼びにくいということで、蔵原が提唱した折衷案が通ったもの（というようにしたのは、佐々木の仕事で、これ以後、プロレタリア科学研究所その他を除いた左翼文化団体にエスペラント名が与えられ、いずれも若干ゆがめられた形での略称がまかり通ることになった。コップ（プロレタリア文化連盟）・ナルプ（プロレタリア作家同盟）・ヤップ（プロレタリア美術家同盟）・プロット（プロレタリア演劇同盟）・プロフォト（プロレタリア写真家同盟）・プロキノ（プロレタリア映画同盟）など。

プロ芸のプロレタリア劇場と前芸の前衛座も当然合同して、左翼劇場がスタートする。佐々木はこれ以後にさかんになったプロレタリア・エスペラント運動の外にとどまり、プロットの中心として奮闘する。文化団体の中に共産党や共産青年同盟の組織がではじめる二、三年のうちに、委員長なんかをしている佐々木は運動の中心からは浮き上がっていたように見える。しかし、これは後のことである。

左翼劇場の第一回公演は『磯茂左衛門』（藤森成吉作）の禁止で、あわてて、三好十郎の『首を切る

のは誰だ』などでお茶をにごしたが、第二回公演の脚本で頭をひねっているときに、たまたま石黒修に出会ふと、アレキセイ・トルストイの『ダントンの死』のエスベラント訳を見せられた。佐々木は『種蒔く人』時代に、ロマン・ローランの『ダントン』を上演しようとして当局に禁止された覚えがある。同じ「ダントン」だ。村山知義・佐野碩・小野宮吉らも、この戯曲の選定に同意した。佐々木がさっそく翻訳する。ほぼでき上がったころ、杉本良吉がロシア語の原書を手してきたので、両者を対照して補正加筆。一九二九年一月二十六日から二十九日まで、築地小劇場でプロット結成記念公演として上演する。作家同盟の機関誌『プロレタリア文学』の創刊号（一九三二年一月）が『金属のために』という、岡一太（ペンネーム、羽多野敏）がエスベラントから翻訳した小説ののせたのと同じ異曲である。村山・佐野の共同演出。ダントン（佐々木）、ロベスピエール（小野宮吉）、カミーユ・デムラン（杉本良吉）、ラクロ（仲島洪三）、コロ・デルボア（伊達信）、エルマン（峯桐太郎）、フキエ・タンヴィル（藤田満雄）、エロー・ド・セシエル（藤木貞治）、サン・ジュスト（村山）、リュシー（関鑑子）、アンナ（平野郁子）、ロザリー（小室あけみ）、ジャンヌ（原泉子）というキャスト。エスベラントから翻訳された戯曲が日本のまともな舞台にかかった最初の、そして本日まででは、最後のものではあった。

それにしても、こうした佐々木の活動の背後に『種蒔く人』『文芸戦線』『戦旗』などに結集した闘闘的文化人、神を殺すことを念願としていた人びとの力があつたことを見のがせない。あまりにも肥大化し、あまりにもリアリストになった現在の左翼文化運動との対比において、エスベラント運動の地位があまりにも低くながめられていることをわれわれは歎かざるを得ない。これはまた一面におい

て、社会的関心を示すことを拒否することを保身の策とする、また、「農協さん」なみに海外旅行することを唯一最大の目的としかねない日本エスベラント運動そのものの責任でもある。理想を失っては、政治運動も文化運動も成立し得ないことを、わが老化青年たちはとくと認識すべきであらう。

「学連」の闘士たち——伊東三郎・武藤丸楠

友よ自由へ！ 太陽へ！ 進め光へ！

暗の過去よりわれわれに未来ぞかがやく

暗の過去よりわれわれに未来ぞかがやく

赤衛軍のマーチを高らかにとなえて別れたわが友、若きエスベランチスト。かれは大阪市電争議のさい、無知なる学生どもの無知なる行為をいきどおって「学生連合」の名においてかれらに反省をうながした。そのため、かれは学校を追われたのだ。

「大阪外語」を追放されたのだ。

かれは去った。しかしかれのまいた種は芽を出すであらう。かれは去った。しかしかれの与えたシヨックはまだ人びとの胸に残っている。故郷の岡山で歌うだらう。

わが友、若きエスベランチストは

友よ自由へ！ 太陽へ！ 進め光へ！

不労所得に生きる学生たちよ、ハッキリ目をさましてくれ。そして若きエスペラチストの歌うのを聞け。追放されたわが友の歌うのを。

暗の過去よりわれわれに未来は輝く

ああ、ついに学生の目ざむべきときが来たのだ。不労所得に生きる学生たちよ。

これは一九二四年十二月号の雑誌『文芸戦線』にのった投書である。投書の主はまるきり見当がつかぬわけではないが、調べるほどのことはあるまい。しかし放校された学生はわかっている。「マルクス主義への道」を書いたロシアの金属労働者シャボワロフと同じように「太陽へ！ 自由へ！」と「にくしみのるつぼ」の原歌、赤衛軍のマーチのエスペラント訳を歌ったのは、のちの共産党中央委員候補、農民部長、伊東三郎であった。

伊東三郎というのは本名ではない。かれの数多いペンネームのひとつで、本名は磯崎巖、のち妻の姓を名のって宮崎巖。エスペラント関係でも多くの名を使ったが、そのうち世人に親しまれているのが、伊井迂、または伊井迂老人、それにこの伊東である。イーウとはエスペラントで「ある人、あるもの」を意味している。地下にもぐってシャれてみたのであろう。古い学生仲間でペートルと呼ばれているのは、かれが労働者向きのエスペラント教科書 *Petio* をしばしば使ったからであらう。大島義夫のペンネーム、高木弘の名で出した『唯物論全書』のうちの「言語学」の大部分を書き、野口樹々の名で『唯物論全書』の後身、『三笠全書』の「児童問題」を書いた。かれが中心になった雑誌『農民闘争』でもいくつもの名を使っただけだが、この分野では後世に残る著作を持たないもようである。

ある。

花むしろの発明者として、国語教科書にのった磯崎眠亀を祖父に持ち、岡山で生まれたかれは、すでに中学生時代にエスペラントを学びはじめや、直ちに詩を書いて、小坂狷二をおどろかせたという。もっとも伊東の話によると、それよりも早く今のマルクス主義哲学者栗田賢三が同じように詩を書いている。

大阪外語時代には、のちに政治的自由獲得労農同盟という長い名前の労働農民党の後身の中心になった原田耕などとエスペラント会を作って、「アクボメローノ（西瓜）」の中心になった。外は縁だが中は赤いという運動である。

一九二五年九月十四日、東大学生控室に集まった全国大学高校の社会科学研究会の代表者、二三校五六名は、従来の「学生連合会」の名を改めて「学生社会科学連合会」としたことによって、日本社会運動史に一時期を画する、いわゆる「学連」を正式に発足させた。「みよ 民衆の旗影は 暗を追いつつ来たる 迎えの楽をかなづ榮 われらは共にになう」ではじまる清水平九郎作の「学連の歌」を歌って、学生たちは、労働組合や農民組合にはいっていき、やがて学連事件や共産党事件に連座し、あるいは獄死し、あるいは転向し、ロシアのナロードニキの運動に比べられる、日本現代史のものと花やかな一ページを自らの血をもって書くわけである。かつて東大・早大などの一部先進校にとどまっていた左翼学生の運動は、ここに全国的な規模を持つにいたった。そうして、それは、第二次大戦の中にあっても、少なくとも東京・京都の大学では吹き消されてしまうことがなかった。

この学連創立大会を機会に、学連加盟校の一高・二高・七高・東京外語・大阪外語の左翼エスペラ

シナストが結集したのが、このアクボメローノであった。⁽²¹⁾

アクボメローノの活動のひとつは、国際排戦デーへの参加である。国際連盟とアムステルダム・インタナショナルはこの年の九月二十四日を国際排戦デーとして行動を求めた。これに応じて学連が立つことをきめたのは、志賀義雄・村尾薩男らの一部先進学生だけでセクト的にこそそそ動こうという方針に反対して、大衆的に公然と活動しようという、いわゆる「リベツ化」(自由主義化、大衆化)の現われでもあった。それは大衆化の方向をとることによって、若干の解党主義的、山川イズムの偏向をも内包していたのもあった。文部省はすでに学生の軍事教練を実施する準備を進めていた。学連は自己の態度を、国際連盟やアムステルダム・インタナショナルとはっきり区別した上で、反軍国主義、軍事教育反対を声明して、全学生的運動にしようとして、国際連盟協会学生支部・キリスト教青年会・エスベラント会などとの共同闘争をうち出した。しかし、成功したのは大阪だけであった。⁽²²⁾

大阪外語・大阪高商のエスベラント会が主催して、国際排戦デーの講演会を開いた。これには進歩的であった森戸辰男、一燈園の西田天香、イギリス人のブレールスフォードが出席した。ブレールスフォードは、神戸の『ジャパン・クロニクル』の記者でクエーカー教徒、第一次大戦には非戦論のため投獄されたエスベランチストで、盲人エスベランチスト岩橋武夫をイギリスへ留学させる糸口をつけた人である。岩橋がかれの期待にどれだけ答えたかは、今日大阪にあるライトハウスそのものが語っている。この言い方は、肯定と否定のどちらにとってもらってもいい、ということだ。

学連第二回大会のときも、七高・京大・福高・大阪外語のエスベラント会を結集する企てがあり、当面必要とする文献の出版計画もたてられた。そして、その直後の学連事件。押収された文書の中に

は、学連がブルにしようとしていたエスベラント会の名も出てきた。⁽²³⁾
今、菊川忠雄の名著『学生社会運動史』からひろうと、次のようなエスベランチストの名が出てくる。

明治学院 田畑三四郎

日本大学 浅野研真・根本潔

東京外語 有村俊雄

京都大学 武藤丸楠

大阪外語 磯崎巖(伊東)

いや、かれらだけではない。栗原佑・秋笹政之輔・小崎正潔・長野昌千代……学連の闘士の圧倒的大部分は、大なり小なりエスベラントをかじり、あるいはかじらなくとも、エスベラントの同情者であった。それは今日の革新政党のエスベラント観とは雲泥の差であった。

一九二四年、仙台で開かれた日本エスベラント大会では、アクボメローノ、いや、伊東たちが努力して、サートの分科会を日本ではじめて開いた。労学提携の実現と言いたいところだが、当時の日本のエスベラント運動の中で「労」はほとんど存在しなかった。このあとでエスベラント青年同盟が発足した。のちに『朝日新聞』の幹部になった藤間常太郎の島之内の家に本部をおいたこの組織は、伊東が書いた青年同盟の歌と二、三のパンフレットをこの世に残しただけであったが、ともかく進歩的なエスベラント運動の組織化の芽であったと言えよう。

この年七月の大阪市電のストライキには、大阪高商・大阪高工・市立工業の学生たちが、社会奉仕

の名におどらされてスキップとなった。争議団が高野山籠城というような「敗北的戦術」⁽²⁴⁾をとったときにこのスキップが市電を運転したのである。学連は直ちに決起して、学校当局その他への抗議運動を組織した。七月十一日、争議団は敗北した。学生処分がつづいた。伊東三郎も放校されたのである。

それから伊東はどうしたのか。東大出の法学士でインテリには惜しいものと言われた長尾他喜雄(貴司山治の小説『ゴーストシップ』の沢田のモデル)の下で、労働農民党大阪府連合会の書記をしていたことが知られている。「いつも破れた臭いクツ下をはいて」⁽²⁵⁾各所に出没したのであろう。

一九二八年に徳田球一や難波英夫を中心に日本労働救援会ができたとき、秋田雨雀や布施辰治とならんで、いまのコトバで言うところ「文化人」として創立発起人になった。「文士」と当局側の資料は肩書をつけているが、はたして、このときまでにどれだけの「文」を書いていたのだろうか。

プロレタリア科学研究所がエスペラント研究会を作ったのは、伊東あたりが言い出したのではあるまいか。秋田・佐々木・新島繁・大栗清実・武藤丸楠……松本正雄も一枚かんでいたのであらう。

伊東はプロ科の農業問題研究会を経て、その大部分のメンバーを率いて、雑誌『農民闘争』を出しはじめる。共産党農民部の息のかかったものである。この「農民闘争」のことについては埴谷雄高がくりかえしくりかえし書いているが、埴谷にとっても、また伊東にとっても、「我が青春に悔なし」と言いきれる時代であった。埴谷の書いた『××と××』というスタイルの題の本のなかで、三冊のうち一冊には必ずと言っていいくらい、「農民一家」とその家長伊東三郎が出てくる。

稀代のアイデアマンである伊東は、その愛称「底ぬけ三平」が示すように、何をやってもシリをし

めくることができない男であった。埴谷説によれば、共産党の方針が絶えずカンパニヤ形態の運動をとるから、伊東もついそれになれてしまつて一時しのぎの機構ばかりを考えたのだと言う。事実として、共同戦線党(合法的労働政党)を否定して、プロレタリアートの党はただ一つとみて、非合法の共産党が合法あるいは半合法の大衆団体を動かして政治闘争をやろうとすれば、こうした形態は必然的とも言えた。政治的自由獲得労働同盟・東京市議選闘争同盟・総選挙闘争同盟・××地方無産団体協議会・全農革新有志団・全農戦闘化同盟・全農戦闘化協議会・合法政党支持強制反対全国農民組合全国会議……あとの四つはいずれも伊東を長といたたく共産党農民部の方針によるものであった。

伊東の下で働いたのは、「農闘」フラクションのキャップ埴谷雄高、学連事件の被告小崎正潔、かつての農民自治主義者、『野良で歌う』の詩人渋谷定輔、漫才の脚本をも書いた稲岡進、『農民運動史』の青木恵一郎、のちに共産党多数派を作る宮内勇、のちの共産青年同盟中央委員長、いまの機関紙印刷所の社長石井輝夫、左翼劇場の名優伊達信、沖繩生まれの松本(真栄田)三益、樹下節のペンネームでロシア文学の翻訳をしている松本傑、浪曲作家になった中川明徳、弁護士であり学術会議会員である守屋典郎、写真の大家土門拳、その他関矢留作・平賀貞夫・森憲隆・永原幸男・隅山四郎……いやケンランたる顔ぶれである。それにレポーターとしての少年組、戦後の共産党中央委員候補を一時期やった遠坂良一、現武蔵大学教授内海庫一郎を考えてみると、まさにオールスターキャストである。残念なことは、この中で本当の農民とともに運動をやったことのあるのは、渋谷・青木らの少数であったことである。

この時代の党、つまり風間丈吉を委員長として、スパイであったことが絶対確実な松村こと飯塚某、岩田義道・蔵原惟人・紺野与次郎・田井為七（この人もエスペラントをかった）・源五郎丸芳晴・児玉静子らを中央部にした党は、もともと多く文化人を吸収し、またもともと多くの地方活動家を中央へひろい上げたものである。大塚有章は、三・一五でありまじりバツとしない行動をとった谷口善太郎を中央部へ吸収するために交渉に行ったことをその『未完の旅路』に書いているが、これは全国的なものであったらしい。守屋・宮内らの岡山組は、あるいは伊東の工作によるものかも知れぬ。のちにスパイとして宮本顕治・秋篠政之輔・逸見重雄・袴田里見らに摘発された大泉兼蔵も新潟の農民組合から上がってきた。

この中で伊東は農民部長から「失脚」した。その性格がわざわざいして、底ぬけぶりを発揮しすぎて、仕事をまとめることがどうしてもできなかったからである。代わったのは赤津益造で、かれは今、日中友好協会（正統）中央本部の幹部である。

従来ブルジョア民主主義革命を当面の任務とする二七年テーゼと異なると、社会主義革命を前面にすえた三一年テーゼ草案、俗に政治テーゼ草案と呼ばれているものは、風間丈吉が書いたことになっているが、本当はコミンテルンで極東部にいたサファロフ（トロツキストとしてのちに失脚）などが、風間に口うつしにしたもの⁽²⁷⁾と言う。このうちの農業問題の部分は（口うつしされなかったのかどうか？）岩田義道たちが書いたものであった。伊東・小崎・埴谷などで歯がたたず、野呂栄太郎の応援を⁽²⁸⁾あおいだことは、埴谷がくわしく書いている。

伊東の「底ぬけ」が農民運動の中でだけでなかったことを埴谷が知らぬのは当然かも知れない。埴谷が対面した伊東は農業問題理論家であっただけで、エスペランティストとしては「あの高名な……」という以上を見せなかったからである。埴谷が言及している『プロレタリア・エスペラント必携』も、伊東が中途半端にしていたのを、大島義夫と畑正世が手を入れて完成したのである。『プロレタリア・エスペラント講座』全六巻の大著も同様で、完成させたのは中垣虎児郎・大島義夫、それに武藤丸楠であった。戦後平凡社で発行した『世界の子ども』全一六巻は、エスペラントその他を通じて世界の子どもの生活つづり方を集めて、それで前に成功した『つづり方風土記』の拡大版をねらったものであるが、このときも伊東は言い出しつづりのひとりとして大いに働いたものだが、やっぱり啄木⁽²⁹⁾ばかりで実務に⁽³⁰⁾適せず、中垣・坂井松太郎・福田正男らがシリヌグイ、いや、けっこうこれで食わしてもらったのであった。

先発型ビッチャーではあっても、どうしても完投できず、たえずリリーフを用意されなければならなかった伊東三郎。その代表作は Verda Parnaso（『緑葉集』）と題したエスペラントの詩集である。ここで伊東はその神童ぶりを発揮して、日本のエスペラント文学の発展に大きな寄与をした。くわしく書いて専門的になりすぎても困るから、このところはこれだけに⁽³¹⁾する。次にあげられるのは、武藤丸楠編ということになっている『日本エスペラント学事始——伊井迂氏談論集』である。これは鉄塔書院の社長小林勇（岩波書店前会長）が歌人でもあった社員の藤沢古実を伊東のアジトへやって口述筆記させたものが相当数ふくまれている。このふたつの本の印税が農民部時代の伊東の生活を支えた。それに戦後に出た岩波新書の『エスペラントの父 ザメンホフ』。しかし、ここでは唯物論者伊東三

郎の姿はすでになく、あるものは、あの松方コレクションにある「ヨハネの首」のような予言者の顔である。

ここでもうひとり登場してもらおう。武藤丸楠である。日本のエスپرانت運動の先駆者のひとり於菟の子である。学連事件の法廷で「そもそもマルクスというような不屈きな名前がいけない」という検事に、「おれの親父はオットーだ。カール・マルクスからとったものではない」という珍問答をしたのも、今は昔の夢である。

その後、河上肇と大山郁夫が監修した『マルクス主義講座』（これは三年テーゼを裏づけた『日本資本主義発達史講座』の影にかくれてしまったが、やはり同じように二七年テーゼをふえんしたものであろう）に青年運動論を書き、『プロレタリア科学』時代にはずいぶん広範囲にわたる解説などを書いていった。ただしふしぎなことには、例の資本主義論争や戦略論争については全然書いていない。二・二六事件を契機に運動から身をひき、学連出身者には珍しく身をまっとうした。戦争中に丸楠の名を変えたことも一時新聞ダネになった。

エスپرانتは子どもの時から父に習っていたらしいが、中垣によると、ちょっとできただけ。しかし、『プロレタリア・エスپرانت講座』を編集しているうちに猛烈に勉強して、全六巻をこしらえている間に名文家になったと言う。この講座の中のレーニンやスターリンの論文のいくつかは、かれがドイツ語からエスپرانت訳したものである。『エスپرانت百科辞典』にはイワン・アルミローフ（アルム）は「武」をもじったもの（？）の名で、日本のプロレタリア・エスپرانت運動のことを書いている。

獄中のエスぺランチストたち

ここにつけ加えたい一節は、死の家の中でエスپرانتを知った人びとのことである。

格子がはいり、金網を張った高い小さい窓、蚊をたたきつぶしたどす黒い血の斑点が一面にあるコンクリートの壁、片すみの便器——ただし新しいところでは水洗になっていた——、ときどき巡回の看守が足音を忍ばせてバタリとあけるノゾキ窓、板敷の上に敷いた薄べり一枚、三步と歩めぬ独房である。発狂せんばかりの酷熱の夏と身体そのもののまでが冷凍されるかのような厳冬、この中で青衣、赤衣の青年たちの身体と魂が腐っていった。治安維持法被告ともなれば、まず一年半ぐらいは何の取調べもなく、いいかげんまいってしまったところから予審がはじまる。そのあと——『赤旗』一部、『無産青年』一部を持っていたとか、のちになれば三人集まって何かしゃべったというだけで、まず軽くても二年の求刑である。（治安維持法にはそれ以下の罰則はなかった）ある者は病み、ある者は狂い、死んでいった。いち早く降伏の白旗をかけた者だけが、ほんのちょびりの肉体の自由と引きかえに精神の自由を売り渡すことができる。転向が真実のものと認められるように行動によって示しさえすれば、末期のころには共産党の中堅幹部でも執行猶予にありつくことができたのである。仏教・キリスト教、その他の宗教の聖典と辞書をその数に入れられないで手もとにおける本は三冊。未決のうちはそれでもまあまあであるが、既決ともなれば、作業終了後の八燭光ぐらいの高所のランプの下で読まね

ばならぬ。三・一五や四・一六の時代の被告はまだいい。外部には救援会があつて力づけてくれた。しかし外部の大衆団体が片っぱしから打ち砕かれてしまった後の犠牲者こそは惨めなものである。それでもインテリ出身の富裕な家庭に生まれたものは幸せだ。ともかく小遣い銭には不自由せず、未決の間ともあれば、毎日差入れの飯を食い、湯タンボを入れ、自分の着物、自分のふとんにくるまっておれる。しかし、鎖よりほかに失うものを持たない労働者はそうではない。一家を支える働き手がここに入っているのだ。ツンツルテンの青いおべべに青い帯で未決の間でも過ごさねばならぬ。週一べんだけのうろこだらけのイワシ、まだ毛のついていないブタ肉一切れが、唯一の蛋白源であつた。

こうした中でたくさんさんの共産党員がエスペラントを学んだ。

柏木ロンド提唱の解放運動犠牲者へのエスペラント書籍差入運動のときの直接の対象になった市ヶ谷・巣鴨などの被告数をまだ調べていないが、この相当部分はおかげでエスペラントを学んだ。この仕事にかかわりのあつた中垣の話では、かつてエスペラントを学んだことのある中央委員三田村四郎は *Fundamenta Krestomatio* (基礎文範) などある程度のものを要求してきたと言う。しかしまた大部分の被告が求めてきたのは入門書と辞書だけであつたとか。ともあれ、この時代の政治犯はエスペラントと切っても切れぬ縁を持っていた。発行禁止になつた『無産者新聞』に代わつた『第二無産者新聞』が編集した『獄窓の同志から』という、柳瀬正夢装丁の、格子の間から握りこぶしをつき出した表紙のある手紙集には、今思ひ出して、実に多くのエスペラント書籍の差入を求める手紙がのつていた。

そしてまた実に多くのものがエスペラント訳聖書ひとつを持って、ときには十年以上の獄中生活に

耐えていたのであつた。かれらの大部分がたとえ本当の意味、いや、皮相的なそれでのエスペラントになれなかつたとしても、それはそれでいいわけである。まことに魯迅が言つたように、ことばをおぼえるだけぐたいせつなのではなく、エスペラントそのものの精神を体得することが問題なのである。塚元周三・坂井松太郎・樋口幸吉・石内茂吉……その他のプロレタリア・エスペラント運動の闘士たちが、本当にエスペラントそのものを知つたのも、皮肉なことだが、こうした獄中であつた。京都地方評議会委員長であつた斎藤英三が、本当にエスペラントに取りくんだのも同じようにここであつた。

一日に一度はうたうくせとなりぬ

黎明をうたうエスペラントのうた

これは斎藤と大田遼一郎の共同歌集『獄中にて歌える』の中のもの。⁽²⁹⁾

本書の筆者のひとり宮本がこのコトバのとりこになつたのも、大阪市北区若松町と堺市田出井町の独房の中であつた。

一九四六年、敗戦の虚脱感と解放感のうずまく中に、粗末な紙に印刷したきわめて特徴ある詩集がこの世に送り出された。日本民主主義文化連盟が発行し、宮本顕治があとがきを書いた詩集『編笠』である。

飢えてふす身は北風の餌食かな

この句の語るとおり、牢獄から解放された人のものだとはずぐにわかつたが、はて、ひろし・ぬや

まとは何者だろうか。聞いたこともない名である。長歌・短歌・俳句、その他日本の伝統的な詩型を自由に駆使し、それにエスペラントの単語をちりばめて読む人の目をひいた特異の詩集。

野呂栄太郎を傷みて作れる歌

この花は下から一つずつ咲いてゆく

——グラディオオーロ

業を了えてすすめばとて

いにしえびとのかくは名づけぬ

ノロの語りし花物語

病みつかれ険しくせまりし頬の骨

しずかなひとみ

いつも熱に汗ばみ、足をひきずりつつあゆみわずらいし

エイタロー・ノロのさびしい姿

ノロを思えば、ひときざみずつ咲きのぼる

グラディオオーロを思い出す

反歌

梓弓引き裂くがごとやつれにし君の手足に花添えましを

著者はその昔のナツ書記長、かつては室生犀星門下であり、地下の『赤旗』印刷所の責任者でもあり、さらに言えば、疑心うずまく末期の共産党からスパイの疑いをもって除名された西沢隆二であった。

西沢は、十数年の刑務所から予防拘禁所への生活の中で、エスペラントを学んできたひとりである。言わずもがなのことを言いたい。この歌はどうもヘンなのだ。グラディオオーロ（グラジオオラス）のラは「a」ではなく「e」である。日本人にザラにあるアールとエルのまちがいがいるのだ。グラジオオラスはエルの方であって、語源から言えば、「程度」ではなく、「剣」なのである。わが日本が持った戦前最高の理論家である野呂栄太郎が、本当にこんなことを西沢に言ったのだろうか。そうだとすれば、野呂もエルとアールが区別できなかったことになって、いささか痛快でもある。それとも西沢の創作だろうか。いずれにもせよ、この長歌は成立しない。あるいは、あまりにも日本的悲劇である。そして、この本を再刊した江崎誠致を社長とする冬芽書房の校正をしていたのは中垣虎児郎その人であったのだが。

もうひとりの大物がある。北海道新十津川村の生まれの新人会会員、西田信春である。四・一六事件で検挙され、二年余りの未決生活ののちに保釈になり、まもなく九州へ派遣され、党九州地方委員

会を再建して活動中に検挙され、そのまま警察で殺されてしまった人。中野重治と石堂清倫と原泉を編集者として発行された『西田信春書簡・追憶』中におさめられた獄中からの手紙によると、エスベラントは相当できた。伊東三郎が書いたと思われる『プロレタリア・エスベラント講座』の広告文の「言葉は力である」に対して、「われわれの側にもこの分野の専門家が要だ」と、これにふくまれて「言語学的物神崇拜」に否定的な意見を書いているのを見のがしてはならぬ。⁽³⁰⁾

獄中でエスベラントを学んだ人を数えていてはきりががない。ここでは反対に、獄中からエスベラントの学習をすすめている人の例をあげておこう。いわゆる「非常時共産党」の文化部長蔵原惟人と、ゾルゲ事件と呼ばれる、今もってその究明が完全にされていると言えない「スパイ事件」の尾崎秀実のふたりである。⁽³¹⁾

注

- 1 吉野作造著、赤松克麿校訂『新井白石とヨワン・シローテ』一九五五年 元々社。
- 2 松尾尊弘「吉野作造と朝鮮」『朝日新聞』一九七三年十二月十七日「思想史を歩く」
- 3 朝比賀昇「大杉栄」La Movado 一九七〇年一月号。Ulrich Lins: Osugi Sakae, Kotzko, 1971. 3, Rotterdam.
- 4 河合秀夫「エロシエンに魅せられた私」La Movado 一九六〇年一月号。のち「エロシエンの思い出」と改題して日本近代史研究会『図説国民の歴史』第十二巻に収録。一九六四年 国文社。
- 5 菊川忠雄 前掲書。
- 6 マーク・ゲイン『ニッポン日記』にあったと記憶する。
- 7 春日庄次郎「エロシエンの思い出」La Movado 一九六八年四月号。
- 8 ウラジミール・ロゴフ「魯迅の友だったロシア人」『スナミヤ』一九五七年七月号、ここではエスベラント版『人民

中国』一九五八年十二月号より。次の『エロシエンコ全集』第三巻にも訳文あり。
第二章27と同じ。石堂清倫・五味川純平編『思想と人間』一九七四年 三一書房版の春日庄次郎との談話中にも。

- 10 8と同じ。
- 11 風間文吉『モスコイ共産大学の思い出』一九五一年 三元社。
- 12 和田航一郎『ロシア放浪記』一九二八年 南東書院。
- 13 Vasilj Erošenko: Gemo de Unu Soleca Animo (ある孤独な魂のうた) 1923, Orienta Esperanto-Propaganda Asocio (上海) および Turo por Fali (落るための塔) 1923, 台湾エスベラント学会(台北)。その後いろいろの版が出ているが、日本語ばかりのものでは、前掲高杉一郎編『エロシエンコ全集』第一巻・第二巻。エスベラントとの対訳は、宮本正男編『やさしいエスベラントの読み物』一九六二年、同『エロシエンコ短編集』一九七〇年、ともに大学書林。

- 14 『雨雀自伝』一九五三年 新評論社。『五十年生活年譜』(戦前)以来、同一本の改題本が各種ある。
- 15 武藤九楠編 前掲書。
- 16 秋田雨雀『若きソヴェートロシア』一九二九年 叢文閣。
- 17 城市郎『禁禁本』一九六五年 桃源社。
- 18 この事情について現在容易に入手できる本は、絲屋寿雄『労働歌・革命歌物語』一九七〇年 青木書店。
- 19 佐々木孝丸『風雪新劇志』一九五九年 現代社。「佐々木孝丸大いに語る」La Movado 一九六八年十月号。
- 20 宮本正男『プロレス運動史の断片的記録 八」Nova Rondo 第一五号 一九七〇年二月 ロンド社。朝比賀昇「種蒔く人」にあらわれたエスベラント」同誌第一七号 一九七〇年十月。
- 21 武藤九楠編 前掲書。
- 22 菊川忠雄 前掲書。
- 23 武藤九楠編 前掲書。
- 24 小泉保太郎(三田村四郎)『左翼労働組合運動』一九二九年 マルクス書房。
- 25 渡辺春男『片山潜と共に』一九五五年 和光社。題名を変えた再版があるはず。
- 26 埴谷雄高『鞭と独楽』一九五七年 未来社。

- 27 風間丈吉『モスコウとつながる日本共産党の歴史』一九五一年 天満社。
 28 埴谷雄高 前掲書。
 29 大田遼一郎・斎藤英三共著『獄中にて歌える』一九三〇年 京都共生閣。
 30 中野重治・石堂清倫・原泉編『西田信春書簡・追憶』一九七〇年 土筆社。
 31 蔵原惟人『芸術書簡』一九六六年 東風社、一九七〇年 新日本出版社。他に青木文庫版もあり。尾崎秀実『愛情は降る星のごとく』一九四六年 世界評論社。青木文庫版・カッパブックス版もあり。



ポエウの機関誌『カマラード』

第六章 希望と嵐の時代——プロレタリア・エスペラント運動の足跡